

vol. 84 千葉市美術館 Chiba City Museum of Art

〔編集・発行〕
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.ccma-net.jp/>
〔発行日〕2018年2月24日
〔印刷〕株式会社恒陽社印刷所

特集

小沢剛 不完全ーパラレルな美術史
Tsuyoshi Ozawa Imperfection: Parallel Art History
2018.1.6 ▶ 2.25

百花繚乱列島ー江戸諸国絵師めぐりー
2018.4.6 ▶ 5.20

館長のつれづれだより 「ローマの北斎展にて」

「素材であそぶ」ワークショップの舞台裏

ボランティア日和



小沢剛《不完全》(部分)、2018年 撮影：椎木静寧



館長のつれづれだより ローマの北斎展にて

『千葉日報』誌上に「北斎作品ローマに集結」「千葉市美術館など230点」と報じられたのをご存じの方も少なくないと思います。

2017年11月12日から2018年1月14日まで途中に展示替えを挟んでの9週間、ローマ市のアラ・パチス博物館で「葛飾北斎ー巨匠の足跡」が開催されました。展覧会には、北斎(1760-1849)の代表作品として知られる「神奈川浪浪裏」や「凱風快晴(赤富士)」をはじめとする風景版画のほか、『北斎漫画』などの絵本や肉筆画も出品されました。この展覧会の特徴は、「北斎の作品だけでなく、優れた弟子の作品をも含めて一堂に会するのは日本でもあまりないのではないか。貴重な機会を楽しんでほしい」とゲスト・キュレーターであるミラノ大学準教授のロッセツラ・メネガッツォさんが講評するように大変充実した内容の展示であり、最終的に12万人を上回る入場者の数を記録したことから、美術には目の肥えた彼の地の人々の関心を満たすに十分であったに違いないと言えるでしょう。

千葉市美術館からは、一説に「北斎に学

んだ」と言われる溪斎英泉の作品を、識者から評価の高い豊富で良質なコレクションのなかから厳選して貸与し、展覧会に協力しました。会場の前半部分の展示を北斎、後半部分は英泉の作品で占められ、実際には「葛飾北斎と溪斎英泉」展の観がありました。北斎に比べるとやや知名度が低い感のある英泉の優れた造形性をイタリア、いやもっと広くヨーロッパの人々に知らせる良い機会となりました。

ロンドンに所用があったわたしもローマに立ち寄り、折よく陳列替えのために出張していた、松岡まり江学芸員に、メネガッツォさんを交えて、一緒に展示を見て回りました。会場には、老夫婦、若いカップル、親子連れ、大学生、そして中高生や小学生のグループと、言うところの老若男女が作品を鑑賞し、楽しむ様子が見られました。なかでも先生に引率されて見学に来ていた小学生の姿が、わたしは特に印象に残りました。児童たちは、教育普及の学芸員の解説に、素直に耳を傾け、自ら感じるところの感想を屈託なく述べ、次々に質問をするのです。

そこには、自然な美術鑑賞の有りようが示されており、美術館利用の先進国の子供たちであるとの思いを強く持ちました。言葉を交わすことが出来た子供たちは、覚えてたの日本語で、口々に「ありがとう」と礼を言い、記念の写真も撮りました。美術展を介して、わずかなりとも国際交流の実を上げたものと考えています。

次代を担う子供たちを如何にして呼び込むかと言う課題は、いま、少なからず全国の美術館の間で一つの課題として取り組まれているようです。子供のための展示、小

中高生の入場料の無料化といった試みをすすめる美術館・博物館も少なくありません。しかし、大切なのは、親や教員たちと、一緒に美術館を楽しむ利用するという環境を作っていないといけないのです。前号の本誌ニュースでご報告したように、千葉市美術館では、親子で美術館を楽しむイベント等、すでに積極的な取り組みをしています。皆さまにも是非ご参加くださるようお願い申し上げます。美術館での美術鑑賞のマナーや人としてのモラルといったものも、そこから育って行くものとわたしは思っております。

〔館長 河合正朝〕



アラ・パチス博物館展示会場にて

「不完全な美術史」

Parallel Art History Tsuyoshi Ozawa

パレレルな美術史

不完全な美術史

Imperfection : Parallel Art History

小沢剛 Tsuyoshi Ozawa

担当学芸員に聞きました **現代美術家・小沢剛の魅力とは？**

なぜ、ここ千葉で小沢さんの展覧会をしようと考えたのですか？

理由は二つありますね。たしか 10 年以上前だと思うんだけど、WiCAN プロジェクトに小沢さんが参加して、さや堂ホールで大きな写真の展示がありましたね。その時のインクジェット出力の写真を寄贈していただいたんだけど、収蔵庫に保管されたままになっていて、それがすごく引っかかっていたのは確かですね。

《ベジタブル・ウェポン（いずみバージョン）》(*1)ですね。2003 年、WICAN プロジェクト最初の年でした。小沢さんのプロジェクトは、市内若葉区*のいずみ地区で行われて、その後さや堂ホールでも展示されました。もともと屋外に設置されたものだから、ものすごく大きくて、展示するのが大変だった記憶があります…。*

それをなんとかしたいと思いつつ、ずっと小沢さんの名前が気になっていて…。でも、それはまあ、理由としては二番目ですね。

では、一番目の理由って、为什么呢？

いちばんの理由としては、うちはずっと、長らく、わりとコンセプチュアルな作家を扱い続けてきたじゃないですか。でも、コンセプチュアルな作家というのは、非常に分かりにくい、難しいというのがあって、最近のうちの流れというか、全国的にもそうだけれども、なかなか公立美術館で展覧会をやるのが難しい時代になってきたんです。

ただ、コンセプチュアルな作家全員が難しいわけではなくて、たとえば、この前展覧会をやった赤瀬川さん(*2)などは、わりとコンセプチュアルな性質を持ちつつも、一般の人にもある程度理解できるおもしろさがある。

笑いもありましたしね。

そして、小沢さんがまさに、そういった流れにあるというわけですね。彼自身、赤瀬川さんの影響を受けています。小沢さんの仕事は、コンセプチュアル・アートの中では一般の人にもなじみやすいと考えます。要するに、美術館の今までの活動方針みたいなものを引き継ぎつつ、現代美術を初めて見るような人にも理解してもらえるのではないかと、と。そういった意味で、展覧会の企画を考える時に、小沢さんという名前がまず出てきたんです。それがメインの理由ですね。最初に話した二つ目の理由は、小沢さんと千葉市美術館の縁の始まり、きっかけという意味では大事だけれども。

なるほど…。ところで、今の話にも少し出てきましたが、水沼さんの考える、小沢さんの仕事のおもしろいところとは？

彼の仕事は両極に分かれていて、現代アートを全く知らない初めて見る人でも、何かこう、取っ掛かりがあるというか、おもしろいと思ってもらえる作品でありながら、アートのことにすごく詳しい専門家の人たちにも高く評価されています。ま

ず取っ掛かりとして、ユーモアがあり、おもしろさがある。そして誰もが見てわかる視覚的インパクトがあるという部分がありますよね。ただ、その陰には必ず、社会批判であるとか文化批判であるとか、そういったアートに関する深い部分があるんですね。入口のところは間口が広いんだけど、奥行きが深い。そういったところが、小沢さんの魅力だと思います。

千葉市美術館の幅広い来館者層にも魅力的な作家というわけですね。

うちの美術館は、現代美術の場合には特に層が幅広いんです。わりと東京に近いこともあって、専門家とか業界人がたくさん来てくれる反面、地元の人たちの中には、初めて現代美術を見るような人たちもたくさんいます。どちらにも向けられる作家というのが、望ましいというわけです。

今回の展示の一番の見どころ、ぜひここを見てほしい、というところがあれば教えてください。

今回の展覧会は、テーマは若干硬いんだけれども、作品が非常にスベクタクルというか、視覚的インパクトがある作品がたくさん出ているというのが特徴です。

展示室一部屋ごとに異なる作品が置かれ、迫力がありますよね。

小沢さんは必ずしもそういう作家では無いけれども、たまたま今回展示する作品は、視覚的なイ

ンパクトが強いんです。例えば、《不完全》や《金沢七不思議》はとてもダイナミックな作品ですね。また、《帰ってきたペインター F》では今回初めて 4K プロジェクターを使っています。この作品は、もともと 4K ソース、つまり現在最高の水準で作られているのだけれども、4K プロジェクターを展示のために用意するのはなかなか難しいので。

それでは、いちばん良い状態で見られるのが今回というわけなんですね。

まあ、そういうことですね。それからこの作品は、初めて壁に投影ではなく天井から吊るという特殊な展示になっています。それも含めて、非常にスベクタクルというか、視覚的インパクトが強いということですね。

「話し手：「小沢剛 不完全ーパラレルな美術史ー」担当学芸員 水沼啓和」

*1 「いずみプロジェクト」は、千葉市若葉区の東部にある農業振興地域を舞台に実施。小沢さんを招き、地元の豊かな自然環境や農産物を生かした《ベジタブル・ウェポン（いずみバージョン）》を制作。また、いずみ地区のおすすめスポットを紹介する案内板を千葉大学の学生と共に制作する「サインプロジェクト」も行った。詳細については、「千葉アートネットワーク・プロジェクト 2003 報告書」（発行：千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会、2004 年）を参照。

*2 「赤瀬川原平の芸術原論 1960 年代から現在まで」（会期：2014 年 10 月 28 日～12 月 23 日、千葉市美術館）



《金沢七不思議》2008年
金沢21世紀美術館蔵



《帰ってきたペインターF》
2015年 森美術館蔵



さや堂ナイトプログラム

「林勇気× SJQ ライブパフォーマンス」

林勇気× SJQ の映像と音によるメディアパフォーマンス『遣り取りの行方』を初演します。
2月3日(土)／ 17:00より(16:30開場)／美術館 1 階さや堂ホールにて／有料
円柱が立ち並ぶネオ・ルネサンス様式の銀行建築を利用したホールで、展覧会「遣り取りの行方」の起点となる、映像と音楽が共鳴する即興パフォーマンスを開催します。ここでの内容がその後 9 日間の展示で進化・展開されていきます(2月3日(土)～2月12日(月・祝) まで、twitter を利用し、スマートフォンの写真を使って作品にご参加いただけます。https://yaritori.site)。

さや堂ホール展示プロジェクト

「遣り取りの行方」

林勇気× SJQ による展覧会を開催。映像と音楽が融合したインスタレーション作品を発表します。

会期：2月4日(日)～2月12日(月・祝) 10:00～18:00(金・土曜日は20時まで)

観覧無料／美術館 1 階さや堂ホールにて

◎アーティストーク：2月12日(月・祝) 14:00より会場にて／参加無料

会場にて出展作家の林勇気、SJQ により本展の解説等を行います。
またワークショップ形式で映像と音のインスタレーションを使用した鑑賞体験にご参加いただけます。

主催 千葉市美術館
協力 Sonilab、宝塚大学、Nao Yonamine、NO ARCHITECTS、night cruising



林勇気「another world - eternal」2016年
京都芸術センターでの展示風景写真 撮影：表恒匡

林 勇気

映像作家。膨大な量の写真をコンピュータに取り込み、切り抜き重ね合わせることでアニメーションを制作。その制作のプロセスと映像イメージは、デジタルメディアやインターネットを介しておこなわれる現代的なコミュニケーションや記録のあり方を想起させる。http://kanyukuyuki.tumblr.com

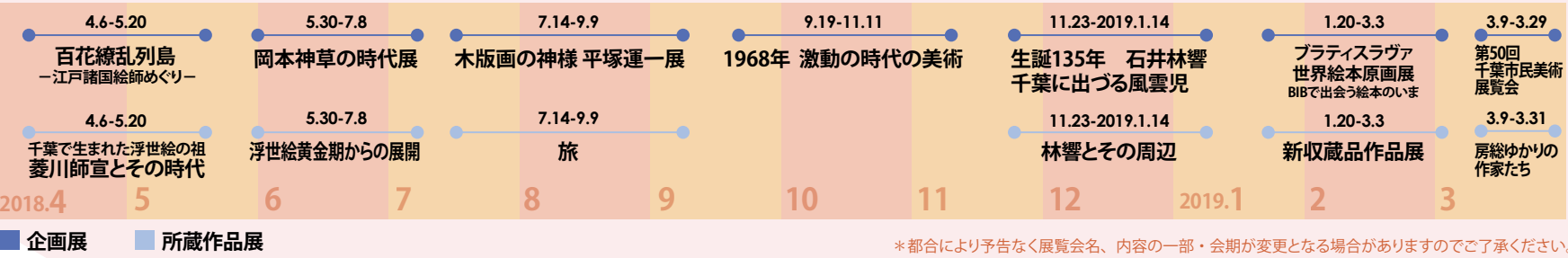


SJQ++「arc」2013年
あいちトリエンナーレ2013でのパフォーマンス

SJQ

魚住勇太（ピアノ）、米子匡司（トロンボーン）、ナカガイトイサオ（ギター）、アサダワタル（ドラム）、大谷シュウヘイ（ベース）によるプロジェクト。ループを用いず、一つ一つの音と音がドミノのように連鎖反応させることで音楽が生まれ、展開する。http://sjq.jp

2018年度 展覧会のお知らせ



* 都合により予告なく展覧会名、内容の一部・会期が変更となる場合がありますのでご了承ください。

うまいもん 百花繚乱列島 ー江戸諸国絵師めぐりー

来年度最初の展覧会は、4月6日より開催の企画展「百花繚乱列島 ー江戸諸国絵師めぐりー」。目下、準備作業も忙しくなってきた担当学芸員に、話を聞いてみました。

——タイトルに「うまいもん」とありますね。食いしん坊の私は、どうしても味めぐり的な何かを想像してしまうのですが…。どのような展覧会なのでしょう？

——全国各地の美術館・博物館では、その土地の生まれであったり、長くその地で活躍した、あるいは藩お抱えであったなど、様々な形でゆかりの深い絵師、いわば「ご当地絵師」の作品を紹介する展覧会が盛んに開かれ、魅力あふれる絵師たちの再発見が進んでいます。しかしその土地のみで展覧会が開催されることが大半であるため、関東圏に住む私たちにはなかなか出会うチャンスに恵まれせん。

今回の企画では仙台、栃木、水戸、名古屋、徳島、鳥取など、各地のご所蔵館に多大なご協力をいただき、そうした知られざる個性派・実力派の絵師たちを大集結させています。一部ですが名前を挙げると蠣崎波響(松前)、菅井梅閑・東東洋(仙台)、小泉斐(栃木)、立原杏所(水戸)、田中訥言・山本梅逸(名古屋)、廣瀬臺山(津山)、守住貫魚(徳島)、沖一峨・片山楊谷(鳥取)など…。展覧会では、地域ごとに章でまとめ、旅をするような構成でご当地の絵師、すなわち「うまいもん」めぐりをお楽しみいただきます。

——来館者の方々には、どのように楽しんでもらいたいですか？

マニアックな絵師が多数登場しますので、江戸絵画に詳しい方でも、ぜんぜん知らなかった!こんな人いたんだ!! という人が必ず一人はいると思います。本展で、新しいお気に入りの絵師を見つけていただけたら嬉しいです。

また、各地の実景を描いた「真景図」も多数ご紹介します。松島や富士山、鳴門といった名所から、絵師たちが旅の中で目にした名もない風景のスケッチまで…。もしかすると、皆さんの故郷や、旅でかつて訪れた場所も登場するかもしれません。そういったところで、親近感を持ちながら作品をご

覧いただければ、と思っています。

——旅に出るような気持ちで、美術館に来られても良いですね。今回展覧会のために調査をして見つかったお宝、もしくは、担当学芸員イチオシの作品を教えてください。

うーん、難しい質問ですね。すべての作品をぜひ見ていただきたいのですが、あえて挙げるとなると、菅井梅閑の《梅月図》(仙台市博物館)でしょうか。表装を含めない本紙の部分だけで約162×89cmという巨幅です。まずその大きさを体感していただきたい。雄渾であり、しかし月下の梅にふさわしく幻想的でもあり、絵の前に立つと梅の巨樹から、濃厚な花の香りが漂ってくるようです。梅閑は他に、雪中の梅を描く《夜梅図》(瑞巖寺)や、伊達政宗ゆかりの臥龍梅をモチーフにとった《舊城朝鮮古梅之図》(仙台市博物館)なども展示します。

——楽しみになってきました!ぜひ皆さま、美術館へお出かけください。



菅井梅閑《梅月図》明和6年(1769) 仙台市博物館蔵



沖一峨《花果方円図》19世紀 鳥取県立博物館蔵



日本画家・大浦雅臣さんによる岩絵具の説明



ワークショップの様子

「素材であそぶ」ワークショップの舞台裏

展示室で作品を鑑賞するとき、描かれている内容や技法に目がいくのはもちろんですが、「これ、何でできているんだろう？どんな材料を使っているんだろう？」という疑問を持つこともあると思います。こういった「素材」への素朴な疑問に取り組むべく、始まったのが「素材であそぶ」シリーズのワークショップです。初回は、企画展「没後 70 年 北野恒富展」にあわせて、岩絵具のなぞに迫ってみました。

現在、日本画用の絵具には、古来の岩絵具（天然の鉱物を砕いてつくった天然岩絵具）だけでなく、人工的に作った原石を砕いてつくる新岩絵具があります。ちなみに、恒富の時代はちょうど新岩絵具の登場で、色数が増えていく時期ともいえます。

画材屋さんの棚に並んだ小瓶と色のグラデーション、キラキラ光る砂のような瓶の中身が気になっていた私たちは、日本画家の大浦雅臣さんを講師としてお招きし、普段なかなか触れる機会の少ない岩絵具の特徴や基本的な使い方を体験しました。馴染みのある水彩絵具との違いを、まさに体感することになりました。なかなか扱いにくい岩絵具ですが、うまくできたときの喜びもひとしお。絵具の物質感に魅せられ、岩絵具のおもしろさを満喫したワークショップになりました。

当日の様子は、美術館のウェブサイト内、イベント報告のページに詳細レポートを掲載していますので、そちらをご覧ください。

ワークショップ「素材であそぶvol.1 岩絵具」
2017年12月16日(土) 13:30～ 11F講堂にて
[講師] 大浦雅臣(日本画家)

http://www.ccma-net.jp/event_05.html



ところで

ワークショップの準備と並行して、鑑賞サポートツール「岩絵具にさわってみよう!」を用意することになりました。大浦さんに教えてもらったり、本で調べたりして取り組んだツール作りの様子を、ご紹介しましょう。



孔雀石(マカライト)
明るく鈍い青緑色(緑青)の顔料になります



展示室 受付横に置かれたツール

砕く



天然鉱石の孔雀石を砕いてつくった緑色の岩絵具は、緑青という色の名前で呼ばれています。ツール作りに用意したのは、粗い方から5番、9番、13番。同じ色の岩でも、どれだけ細かく砕くかで、質感と色が変化します。

溶かす



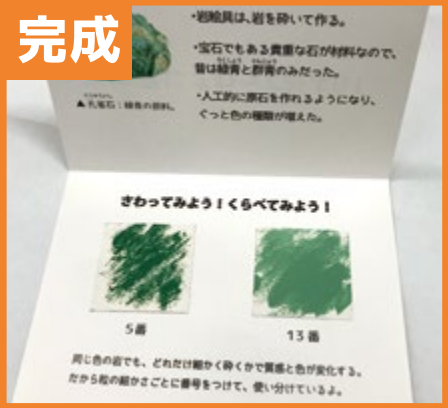
顔料を紙面に定着させるためのメディウムとして膠(にかわ)を用意します。膠は動物の骨や皮から煮出して作られ、ここでは棒状になったものを一晩ふやかし、水を加えて湯煎にかけます。温度計を見ながら 70℃をキープ。

混ぜる



溶かした膠で顔料を溶き、指で混ぜます(後で知りましたが、中指で混ぜるが正解)。温かくとろみがあって、ついいつまでも混ぜていたくなりますが、粉がもともとは「岩」であることを忘れてみると、指先がヒリヒリすることに。

完成



さて、いよいよ描いてみます。しかし、なかなか定着しません。指で触ると粉がサラサラと取れてしまいます。膠を薄めすぎたのでしょうか。その後、四苦八苦しながら見本が完成。恒富や日本画家たちの技術と苦勞に想いを馳せたのでした。

ボランティア日和

2017年3月、ボランティア仲間の親しい友人が亡くなり沈思熟考するきっかけとなった。

自問:「今までの『展覧会』で最も印象的な作家は?」

自答:「杉本博司」

自問:「感動した作品は?」

自答:「海景」*

自問:「学んだ事は?」

自答:「目には見えない精神を物質化したものがART+神は細部に宿る」

杉本氏との必然の出逢いは、「20周年記念の企画展」であった。担当学芸員の水沼さんの勉強会は毎回目から鱗の発見があり、杉本ファンのボランティア仲間が語る情熱的な言葉に私の心は揺さぶられた。こ

の期間にインプットされた情報は鑑賞教育プログラムで子供たちに伝え、そして、ギャラリートーク(略GT)という形でアウトプットされた。

GTではいろいろな工夫を試み、特に杉本氏の持仏「十一面観音像」については、著書から一部抜粋した文章を朗読した。GT終了後、駆け寄ってくるご婦人から思わぬコメントをいただいた。

「あなたが朗読している間、観音様が微笑まれているわよ。今は違う御顔をしてみよう。私、確認してきたの。」

率直な感想に内心驚き、観音像前に立ち、半信半疑のまま見上げた。「一期一会…感動の伝播と連鎖現象」だと訓えられたように思った。

千葉県美術館で勉強したことを皆様と共に考え、それぞれ個性ある感動を共有し、

ARTを通じた試行錯誤を積み上げ、人生の糧にしていきたいと思う。皆様、一緒に「プラ千葉美」(プラタモリの変化形)をしてみませんか?

どうぞ遊びにいらしてくださいませ。

*杉本博司「海景」シリーズのこと
(美術館ボランティア 深山やよい)



企画展「杉本博司 今昔三部作」展示室入口にて



千葉県美術館
友の会は
こんなにお得!

◆年会費 2,500 円で何年度も
展覧会が見られる!

◆会員の同伴者が割引または無料に。
さらに展覧会招待券もプレゼント!
お友だちと一緒に鑑賞してみては?

◆ミュージアムショップや
レストランでも割引!

◆バスツアーなど
会員限定のイベントも。

その他特典が盛りだくさん。

詳しくはパンフレットを
ご覧ください。
ご入会を待ちしております。



パンフレットは
受付などで配布中